

2010年度 エコノメトリックスII
& 上級エコノメトリックスII
第3回講義メモ

2010年10月8日

§ 2.2 線形回帰モデルの幾何的理解

2.2.1 準備：ベクトル空間

いま、すべての要素が実数値をとる $n \times 1$ ベクトル x を考えることにしよう。すなわち

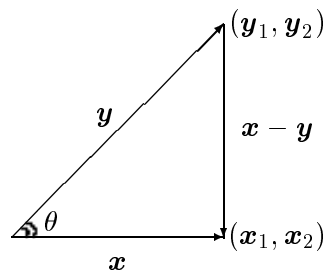
$$x \in R^n$$

である。 n 次元の実数空間 R^n に距離と内積を導入する。厳密に言うと、 n 次元のベクトル空間は R^n を単なる集合でなく R^n の演算まで入れて考えたものを指している。

$x, y \in R^n$ としたとき、距離 $d(x, y)$ 、内積 $\langle x, y \rangle$ を次のように定義する。

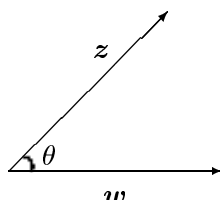
$$\begin{aligned} d(x, y) &\equiv \sqrt{(x - y)'(x - y)} \\ \langle x, y \rangle &\equiv \|x\| \|y\| \cos \theta = x'y \\ &\text{where } \|x\| = \sqrt{x'x} \quad (\text{ノルム}) \end{aligned}$$

R^n に距離と内積を導入した空間を n 次元ユークリッド空間といい E^n で表す。



Note.

$w, z \in E^2$ とする。いま $w = (1, 0)'$ とする。ここで $\|w\| = 1, \|z\| = 1$ であるものとする。このとき、 $\|z\|^2 = \cos^2 \theta + \sin^2 \theta = 1$ であるから、 $z = (\cos \theta, \sin \theta)'$ と表すことができる。これより、 $\langle w, z \rangle = w'z = \cos \theta$ が得られる。



一般化して $x = \alpha w, y = \gamma z (\alpha, \gamma > 0)$ とすると、

$$\begin{aligned} \langle x, y \rangle &= \alpha \gamma \langle w, z \rangle \\ &= \|\alpha w\| \|\gamma z\| \cos \theta \end{aligned}$$

がえられる。ところで、 $-1 \leq \cos \theta \leq 1$ であるから、

$$|\langle x, y \rangle| = \|\alpha w\| \|\gamma z\| |\cos \theta| \leq \|\alpha w\| \|\gamma z\|$$

という不等式が得られる。なお、 $|\langle x, y \rangle|^2 \leq \|x\|^2 \|y\|^2$ を Cauchy-Schwartz の不等式と言う。

線形部分空間 (subspace)

R^n の空でない部分集合 \mathcal{W} が以下の条件を満たすとき、 \mathcal{W} は R^n の線型部分空間 (linear Subspace) であるという。

- a) if $x, y \in \mathcal{W}$ then $x + y \in \mathcal{W}$
- b) if $x \in \mathcal{W}, a \in R$ then $ax \in \mathcal{W}$

テキストでは、 $x_i \in \mathcal{W}, b_i \in R$ について ($i = 1, \dots, n$)

$$\sum_{i=1}^n b_i x_i \in \mathcal{W}$$

として定義。そこで、再び定義し直すと、次のようになる。

部分空間 (線形)

$\{x_1, \dots, x_n\}; x_i \in E^n$ を基底ベクトル (basis vector) とする。さらに、 $k (< n)$ 次元の E^n の部分空間 $S(x_1, \dots, x_k)$ を次のように定義する。

$$S(x_1, \dots, x_k) \equiv \left\{ z \in E^n \mid z = \sum_{i=1}^k b_i x_i, b_i \in R \right\}$$

$\mathcal{S}(x_1, \dots, x_k)$ は x_1, \dots, x_k が張る空間という。

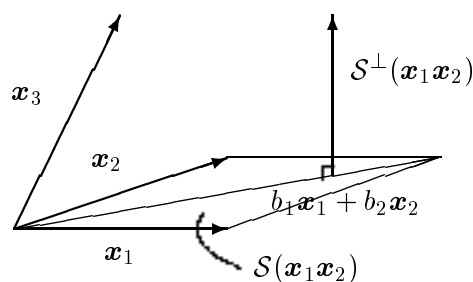
部分空間 $\mathcal{S}(x_1, \dots, x_k)$ の直交補空間 $\mathcal{S}^\perp(x_1, \dots, x_k)$ は次のように定義される。

$$\mathcal{S}^\perp(x_1, \dots, x_k) \equiv \{w \in E^n \mid w'z = 0 \text{ for all } z \in \mathcal{S}(x_1, \dots, x_k)\}$$

直交補空間の次元は $n - k$ となる。

(例) $k = 3$ のケース

$x_1, x_2, x_3 \in E^n$ としよう。この時 $\mathcal{S}(x_1, x_2)$ は x_1 と x_2 の線形結合の作る空間全体となり、 $\mathcal{S}^\perp(x_1, x_2)$ はその空間に直交する空間となる。



$$\begin{aligned} \mathcal{S}(x_1, \dots, x_k) \cap \mathcal{S}^\perp(x_1, \dots, x_k) &= \{\mathbf{0}\} \quad \text{点: ゼロベクトルからなる集合} \\ E^n &= \mathcal{S}(x_1, \dots, x_k) \oplus \mathcal{S}^\perp(x_1, \dots, x_k) \end{aligned}$$

ここで、 \oplus は直和 (direct sum) を表す記号である。

Note: 直和

$\mathcal{W}, \mathcal{W}_1, \mathcal{W}_2$ を \mathcal{V} (いまの例では R^n) の部分空間としよう。このとき、 $\mathcal{W}_1 \cap \mathcal{W}_2 = \{\mathbf{0}\}$ であって、

$$\mathcal{W} = \mathcal{W}_1 + \mathcal{W}_2$$

かつ、 $u \in \mathcal{W}, u_i \in \mathcal{W}_i (i = 1, 2)$ について

$$u = u_1 + u_2$$

の形に一意に表現できるとき、 \mathcal{W} は、 $\mathcal{W}_1, \mathcal{W}_2$ の直和であるといい、

$$\mathcal{W} = \mathcal{W}_1 \oplus \mathcal{W}_2$$

で表す。

定義 2.2.1 一次独立

x_1, \dots, x_k が一次独立 (linearly independent) であるとは、次と同値である。

$$\sum_{i=1}^k b_i x_i = 0, \quad \text{iff } b_i = 0 \forall_i$$

定義 2.2.2 一次従属

x_1, \dots, x_k が一次従属 (linearly dependent) であるとは、次と同値である。

$$\sum_{i=1}^k c_i x_i = 0 \quad \exists c_i \neq 0$$

命題 2.2.3

いま、 $X = (x_1, \dots, x_k)$ であるものとする。もし、 x_1, \dots, x_k が一次独立でない、すなわち一次従属であるならば、 $X'X$ は可逆 (invertible) ではない。

[証明] text p.53 参照。もし、 x_1, \dots, x_k が一次従属であるならば、 $Xb = 0$ を満たす $b \neq 0$ が存在する。

$$Xb = 0 \text{ であるから、} X'Xb = 0$$

もし $X'X$ が可逆であるなら、

$$\begin{aligned} (X'X)^{-1}(X'X)b &= I \\ b &= Ib = (X'X)^{-1}(X'X)b = 0 \end{aligned}$$

を満たす $(X'X)^{-1}$ が存在することになる。これは $b \neq 0$ であることに反する。

部分空間の次元

いま、行列 $X = (x_1, \dots, x_k)$ を考えよう。 X の列ベクトルのうち、一次独立であるものの (最大) 個数を X の階数 (rank) といい、 $\text{rank}(X)$ で表す。このとき、

$$\text{rank}(X) = \dim S(X)$$

という関係が成立する。

定理 2.2.4

もし、 $\dim S(X) = k'$ 、 $k' < k$ であるならば、

$$S \underbrace{(X)}_{n \times k} = S \underbrace{(X^*)}_{n \times k'}$$

が成立する。ここで、 X^* は X のうち、一次独立な列ベクトルからなる行列である。

§ 2.2.2 OLSE の幾何的理解

さて、前節のフレームワークを使って、OLS 推定量の幾何的理解を試みよう。

線形回帰モデル $y = X\beta + u$ の OLSE は、 $\hat{\beta} = (X'X)^{-1}X'y$ で与えられる。いま、残差ベクトル \hat{u} を

$$\hat{u} = y - X\hat{\beta}$$

と定義するとき、

$$X'\hat{u} = 0 \quad (2.2.2.a)$$

が得られる。なぜなら

$$\hat{u} = y - X\hat{\beta} = (I - X(X'X)^{-1}X')y$$

であるから、

$$\begin{aligned} X'\hat{u} &= X'(I - X(X'X)^{-1}X')y \\ &= 0y = 0 \end{aligned}$$

が得られる。

言い換えると、

$$X'\hat{u} = 0 \quad \iff \quad \bar{x}_i'\hat{u} = \langle \bar{x}_i, \hat{u} \rangle = 0 \quad \forall i$$

すなわち、 \bar{x}_i , ($i = 1, \dots, k$) と \hat{u} は直交する。ここで、 \bar{x}_i は説明変数行列 X の i 番目の列ベクトルを指し、この授業の記法では

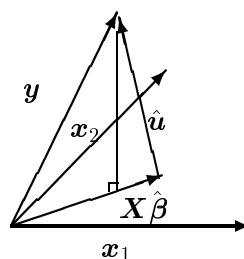
$$X = (\bar{x}_1, \bar{x}_2, \dots, \bar{x}_k) = \begin{pmatrix} x'_1 \\ x'_2 \\ \vdots \\ x'_n \end{pmatrix}$$

という関係になっている。

さて、 $\hat{y} \equiv X\hat{\beta}$ とすると、

$$\hat{y} \in S(X), \quad \hat{u} \in S^\perp(X)$$

という性質が導かれる。



上図より、 $\|\hat{u}\|$ が最小となるのは $X\hat{\beta}$ と \hat{u} が直交するときのみであることが分かる。ここから、モーメント法推定量 (MME) が最小 2 乗推定量 (OLSE) と等しくなることが分かる。

さらに、ピタゴラスの定理より

$$\begin{aligned}\|y\|^2 &= \|X\hat{\beta}\|^2 + \|\hat{u}\|^2 \\ \underbrace{y'y}_{TSS} &= \underbrace{(X\hat{\beta})'X\hat{\beta}}_{ESS} + \underbrace{(y-X\hat{\beta})'(y-X\hat{\beta})}_{RSS}\end{aligned}$$

直交射影

$y \in E^n$ において

$$y = z + w \quad z \in S(X), \quad w \in S^\perp(X)$$

と表されるとき、 z を y の $S(X)$ の上への直交射影という。この直交射影を変換行列 (= 射影行列) を使って考えるとわかりやすい。いまの例では、

$$\begin{aligned}z &= P_X y \\ w &= (I - P_X)y\end{aligned}$$

になる。

[memo]

- 部分空間に垂線をおろすイメージで捉えると理解しやすい。
- invariant sub-space 不変部分空間 = 部分空間への射影が部分空間で一定。

OLS では、次の2つの射影行列

$$\begin{aligned}P_X &= X(X'X)^{-1}X' \\ M_X &= I - X(X'X)^{-1}X' = I - P_X\end{aligned}$$

が重要である。なぜなら、

$$\begin{aligned}\hat{y} &= P_X y \in S(X) \\ \hat{u} &= M_X y \in S^\perp(X)\end{aligned}$$

この直交性は P_X が対称 (symmetric) であることに由来している。テキスト p.59 後半を見よ。

また、 M_X, P_X は冪等 (べき等: idempotent) と呼ばれる行列であり、

$$\begin{aligned}M_X M_X &= (M_X)^\ell = M_X, \quad (\ell = 1, 2, \dots) \\ P_X P_X &= (P_X)^\ell = P_X, \quad (\ell = 1, 2, \dots)\end{aligned}$$

という性質を持つ。

次に P_X, M_X が onto であることを示そう。

$$\begin{aligned}P_X Xb &= Xb \\ M_X \hat{u} &= \hat{u} - X(X'X)^{-1}X'\hat{u} = \hat{u}\end{aligned}$$

であるが、さらに $M_X X = O$ より、

$$\hat{u} = M_X y = M_X X\beta + M_X u = M_X u$$

であることにも注意。

一般に、

$$I = P_X + M_X \Rightarrow \begin{cases} y = P_X y + M_X y \\ \quad = \hat{y} + \hat{u} \end{cases}$$

と分解できるが、 $X' \hat{u} = 0$ とすると、 $P_X M_X = O$ が得られる。これを annihilate (アナイアレート) という。

ピタゴラスの定理より

$$\|P_X y\|^2 \leq \|y\|^2$$

Non Singular transformation (非特異変換)

いま A を $k \times k$ の full rank の行列とする。このとき、

$$S(X) = S(XA)$$

$$P_X = P_X A$$

が成立し、invariance residual の話がここから導き出せる。